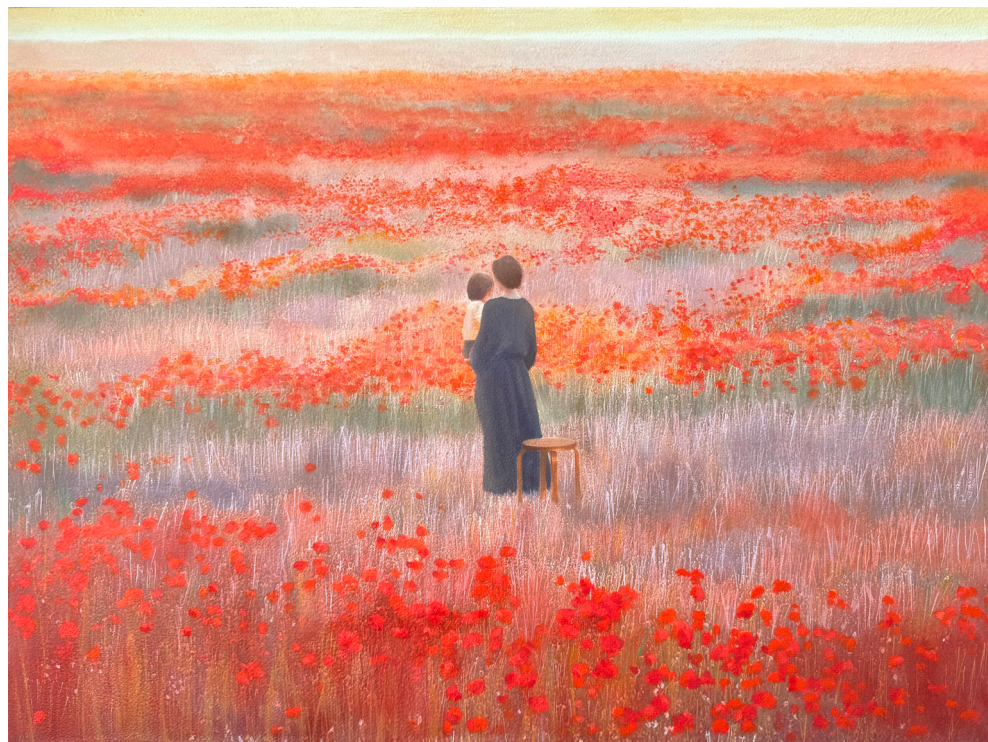


内田すずめ 個展 「本当の君でいい」

会期：2025年12月6日（土）～12月26日（金）

会場：SAI



www.saiart.jp

SAI では、2025年12月6日から12月26日まで、内田すずめによる個展「本当の君でいい」を開催いたします。本展は 2023 年 “NEW” での個展以来、約 2 年ぶりの開催となり、内田にとって過去最大の展覧会となります。

内田すずめは、心の奥底に刻まれた原体験の記憶を、まるでドキュメントするかのように描いてきました。生きることへの悲しみや不安、そしてその先にある希望と喜びを、絵画というかたちで表現し続けています。

幼い頃から絵を描くことが何よりの喜びであった内田は、その想いを胸の奥に閉じ込めたまま成長しました。無意識のうちに自己の存在を否定しながら生きてきた彼女にとって、この世界は迷いと苦しみに満ちたものでした。社会に馴染めず会社も辞め、孤独の中にあったある日、内田は導かれるようにして絵筆を手に取り、心の奥底に潜む感情を吐き出すように絵を描き始めます。

絵画と向き合うことは、内田にとって自身の原体験と真摯に向き合う行為であり、深い痛みを伴うものでもありました。しかしその過程で生み出された偽りのない作品は、これまで多くの鑑賞者の心を捉えてきました。

本展「本当の君でいい」では、一人の女性として子どもを産み、母となる経験を経た内田が、そのなかで揺れ動く心の変化をテーマに制作した新作を発表します。

かつては「消えてしまいたい」と考えていた本人が、命を受胎し、生物学的に遺伝子を残すという事の迷いや葛藤。そして子どもを持つことで芽生える新たな感情や過去の自分に対してのまなざしを主題にします。

生命とは何か。生きることとは。

静かな光が翳す、象徴的な世界に触れていただければ幸いです。

ーアーティストステートメントー

生物は子孫を残すことが本能として植え付けられているらしい。

ならば子供を欲しいと思えない私は普通ではないのか。

何年も悩んだ末、子供を産むに至った理由はいくつもある。とりわけ絵の発表を続ける中で、自分のことを少しずつ好きになれたのが大きかった。生きていくことを許された気がしたのは、たくさんの人が私の絵を大切に思ってくれたからだ。

人から望まれた生き方なんてなくていい。

大人になった今、私は幼いころの私を抱きしめてあげたい。

本当の自分でいいし、幸せでいてくれたらそれだけでいいんだよ。

時間は未来から過去へも流れていく。過去は終わったものではなく、今も進行している経験の一部だから。

一生懸命生きていこう。これから出会える全てのことが、私たちが生まれてきた意味を教えてくれるだろう。

プロフィール

内田すずめ（うちだすずめ）

アーティスト。1986 年生まれ。筑波大学卒業。勤めていた会社を退職後、アートと出会いコレクションを始める。その後 27 歳から絵を描き始め、2014 年に初個展。以降、国内外での展示活動を行う。作品に共通しているのは負の心緒よりも原体験から来る生気が感じ取れる点であり、写実的なアートワークでその息吹をリアルに表現してきた。2017 年の Yohji Yamamoto POUR HOMME との合作を皮切りに、Y-3、BE@RBRICK 等コラボレーション多数。

内田すずめのシン・受胎告知

布施英利（芸術学者・東京藝術大学教授）

イタリアのフィレンツェにウフィツィ美術館というのがあって、そこにレオナルド・ダ・ヴィンチの絵画『受胎告知』が展示されている。

画面に描かれた登場人物は二人で、キリストの母マリアと、マリアが懐妊したことを告げに来た天使だ。マリアは、天使から「あなたは神の子キリストを身籠った」と受胎を告知され、驚いて両手を開いたポーズをしている。そんな劇的な瞬間を描いた絵画だが、とくに宗教心のない者でも誰もがこの絵の前に立つと心打たれる。それはダ・ヴィンチの絵画の超絶技巧にもよるが、そこに描かれたテーマ・物語に惹かれてしまうのだ。つまり人が、女性が、初めて自分の身体の中に子どもができる。それを知った瞬間というのは、たぶん誰の人生にとっても「人生の一大事」であり、そういう宗教を超えた人としての普遍性が、この絵画には描かれているからだ。

画家・内田すずめの展覧会に寄せての文章を書こうとして、500年以上も昔のイタリアの画家の話題などから始めたのは、今回の内田さんの展覧会に出品される作品を見ていて、思わずレオナルド・ダ・ヴィンチの『受胎告知』のことを考えしまったからだ。これは内田すずめのシン・受胎告知とでもいべき展覧会なのではないか。以下では、そんな話を書いてみたい。

内田すずめは自己を見つめる画家である。自画像の画家と言っても良い。彼女は、いろんな形での旧来の自画像というもののイメージを超えた自画像を描いてきた。たしか初めて彼女の作品を見たのは、若い人が企画したグループ展だった。季節は夏。展覧会のテーマは真夏らしく幽霊画で、いろんなアーティストがそれぞれイメージする幽霊を描いていた。そこに画面に髪の毛の束を貼り付けて、それ以外なにも描いてない作品があった。髪は顔の輪郭をなぞるように曲がり、目も口もない白い顔が浮き出ている。その作品の横に女性が立っていて「これは私の作品です」と言う。服薬の副作用とストレスで髪が抜け、その髪を集めて作品にした、と説明する。いっけんネガティブな主題を描き、どちらかというと引きこもりタイプの人間の作品のようだが、しかし懸命に作品のアピールをする。その積極性と、作品画面の消極的テーマのギャップ。いっただいこの人の本質はどっちなんだ、と思った。いま思えば、そのギャップにこそ、画家・内田すずめの世界があったのかもしれない。

そんな出会いから、今日までの彼女の作品展開を見てきた。モノクロの絵画で、裸の女性（おそらく画家自身）が、お腹を切り裂いて、そこから腸を引っ張り出し喰べている。そんな絵もあった。これも摂食障害の悪夢を作品化したものなのだろうかと思ったりした。

そんなある日、内田さんの SNS で、パリにいる、という投稿を目にした。旅をしているのかなと思った。そしたら翌日の投稿はパリコレのファッションショーの写真だ。美術館とは違って、パリコレは関係者でないと入れないはずだ。どんな立場でパリコレの会場にいるのか？ そうしたら次の日の投稿で、なんとヨウジ・ヤマモトのショーで、内田さんの絵をプリントしたモデルたちの写真が投稿された。え？ パリコレに参加しているの！ いつの間に内田すずめさんは、そんな表現のステージに立ったのか。後で聞いた話だが、ヨウジ・ヤマモトでは、若い画家の作品で「目力が強い」顔を描いたものを探していて、それで内田すずめさんの絵に白羽の矢が立ったらしい。

そんなふうにして、小さな画廊のグループ展で「これは私の作品です」と熱心に語っていた無名の若い画家は成功の階段を上がっていった。

さて、今回の展覧会の絵だ。はじめに書いたが、私はこれらの作品に、勝手に「シン・受胎告知」というレッテルを貼ってみた。

まず、いわば自画像（しかも自己否定をするようなネガティブな主題の自画像）を描く内田の人生に、大きな変化が起こった。妊娠・出産を経て母となったのだ。これまで、摂食障害・自傷など（それらは必ずしも悩める若者だけに見られるものではないが）悩み多き若い女性だった画家が、母になったのだ。今回の

作品は、それらの体験を経て開かれた、新しい世界たちを描いたものである。妊娠・出産そして子育てとは、人間にとって（女性にとってだけでなく）一体どういうものなのか。そんな世界を垣間見る作品が私たちの前に現れることになった。子どもを授かって希望に満ちた（という表現がしたくなる）明るい絵画は、2023年の個展あたりからみられるようになったが、今回はそれが深化している。

かつての内田は、自分の子どもを産む、などということは考えてもいなかったという。逆に、親から与えられた遺伝子を持つ自分の身体を嫌悪し、できることなら自ら命を絶って、自分もろともこの遺伝子を消し去りたいとすら考えていたという。

ともあれそんな内田が子どもを授かることになった。しかも、その方法は「体外受精」だったという。シャーレの上に浮かぶ卵子。そこに注がれる精子。そういうガラスの上で受胎の試みは行われた。それは生命のドラマであるが、しかしどこか生命の営みというものとは別の光景のようでもある。内田すずめは、そんな自身の体験を、人生の姿を、絵画として作品化する。

それはレオナルド・ダ・ヴィンチが描く『受胎告知』の世界と、どこか似ている。マリアは、生殖行為なく、神の子キリストを授かった。実際どうだったのか不明だが、聖書にはそう書かれる。そんなマリアの懐妊、キリストの誕生は、ガラス皿の上で進行した生命の人工的な操作と、どこか通じるものがある。その「冷たさ」のようなものを視覚化した感覚に、レオナルド・ダ・ヴィンチの絵画の魅力を感じ、内田すずめが描く画家自身の「シン・受胎告知」に共通するものを感じたのだ。

レオナルド・ダ・ヴィンチは子宮の中の胎児を描いたし、そもそも『モナリザ』も妊娠した女性を描いたものだ、という説もある。ダ・ヴィンチの生命誕生への眼差しは、ウフィツィ美術館にある『受胎告知』だけではなく、その絵画世界の主題の全体を貫いてもいる。ともあれ、ダヴィンチの『受胎告知』だが、内田すずめの新世界に通じるものがある。ただし、ダ・ヴィンチの絵に描かれているのは画家から絵の中の登場人物への「他者からの眼差し」みたいなものだが、内田すずめは、それを「自画像」として、内側の眼差しで見せてくれる。そこは違う。

さて、生命の誕生というのは、単にもう一つの新しい命が生まれるということだけではない。解剖学者の三木成夫は、胎児の世界を研究して、胎児の成長は生命進化の歴史をそのまま繰り返すという考えに至った。三木はそれを「生命記憶」と呼んだ。胎児の世界には、生命進化のプロセスを繰り返す、何億年にも及ぶドラマが凝縮されているのだ。内田すずめが描く、シン・受胎告知にも、そのような生命に注ぐ眼差しがある。今回展示されている絵画の一つ一つを味わいながら、その生命の物語がどのように進んだか、そしてそれは、その作品を見ている「この私」と何が同じで、この私の中に何が響くのか。

それを内田すずめの「自画像」を、鏡に映った自分の姿を眺めるように、私たちは生命体である自分を改めて発見しないといけない。その絵は語っている。この世界は、苦しい世界だが、美しい、と。

www.saiart.jp

展覧会情報

内田すずめ 個展 「本当の君でいい」

会期：2025 年 12 月 6 日（土）～12 月 26 日（金）

会場：SAI（サイ）

住所：〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 6-20-10 RAYARD MIYASHITA PARK South 3F

時間：11:00 - 20:00

電話：03-6712-5706

メール：info@saiart.jp

Instagram：@sai_miyashita

是非、貴誌・貴社にて御紹介下さいますよう宜しくお願いいたします。
尚、詳細のお問い合わせ等ございましたら、下記までお問い合わせ下さい。

SAI 担当 實久（Sanehisa）

Mobile: 03-6712-5706

Mail: info@saiart.jp